

『梅花』 高啓

梅花 高啓

梅花 高啓

瓊姿只合在瑤臺。

瓊姿只合に瑤臺に在るべし

誰向江南處處栽。

誰か江南に向つて處處に栽えたる

雪滿山中高士臥。

雪滿ちて山中高士臥し

月明林下美人來。

月明らかにして林下美人來る

寒依疎影蕭蕭竹。

寒は依る疎影蕭蕭の竹

春掩殘香漠漠苔。

春は掩う殘香漠漠の苔

自去何郎無好詠。

何郎去つて自り好詠無し

東風愁寂幾回開。

東風愁寂幾回か開く

〔作者について〕

一三三六～一三七四、元末明初の詩人。長州（江蘇省蘇州）の人。書は読まざるものなし、という博学で特に史書を好んだ。詩は漢魏から唐宋まで広い範囲から学び取っていたといわれている。

元の末、戦乱が続く中、群雄の一人張士誠が蘇州を都とした。張士誠の重臣饒介のサロンに招かれ、諸先輩大家の前で真っ先に佳詩を作り、詩名をあげた。蘇州の郊外、松

江の青邱に住んだので青邱と号した。

その後、朱元璋（明の太祖洪武帝）が全国を統一して南京を都とした。このとき高啓は三十三歳。

太祖は明国の文化政策として「元史」編集の事業を起こし、高啓も編集員の一人に選ばれた。「元史」完成の後、戸部侍郎（大蔵次官）という要職に抜擢されたが、急速な昇進を嫌ってか辞職し帰郷した。

南京にいた頃から交遊があった魏観が蘇州知府（長官）として赴任してきた。魏観は賢才で、文学のたしなみも深く、蘇州へ来てから天下第一といわれる治績をあげ、一度は栄転が発令されながらも後任難で再任を命ぜられるほどの信望を集めた。

事件は以前に張士誠が元代の蘇州府庁を宮殿として使い、府庁を別の場所に移した。新府庁は場所も悪く手ぜまなので、魏観は旧庁を修理して移転した。それを魏観が謀反をたくらんでいる証拠だと太祖へ密告する者があって弾劾され、死刑になった。

この時高啓ら多数の友人も一党と見なされて同時に死刑になった。一三七四年、歳三十九であった。

妻との間に四人の子供があったが、男児と女児とが彼に先だって死に、女児二人だけが残った。中国では女系相続をみとめず、跡を継がせる近親の男子もいなかったようである家は絶えてしまった。

「山園小梅」と「梅花」

梅を詠じた詩は六朝から唐を経て実におびただしい数の作品が産まれた。梅は中国詩歌の最も古く最も一般的な題材の一つであったといつてよい。

林逋りんぼの「山園小梅」が世に出てから後世に影響を与え、梅の詩の中では最高の作品と評された。特に領聯りやうれんの評価はきわめて高く「疎影」

「暗香」の字句は梅花の代名詞となった。また

「横斜」「清淺」「黄昏」も宋以降の梅花の詩に登場することになった。

比較する意味で二詩の領聯りやうれんを列記する。



高啓像

山園小梅

疎影横斜水清淺 暗香浮動月黄昏

梅花

雪滿山中高士臥 月明林下美人來

どの様に感じられますか。林逋の詩には心理描写を奥深く秘め、自然の情景に託した描写、一方の高啓は自分の持っている知識を駆使して、少し技巧に走った感があるとおも

われる。しかしこの句は梅花を歌った絶唱として並び称せられている。

【字解】

高士臥

後漢の袁安えんあんの故事。彼がまだ仕官せぬころ、ある冬の日に大雪が降った。洛陽の令（地方長官）が見回ってみると、どの家でも雪を搔いて、食べ物を探しに出かけているのに彼の家だけは雪が積もったままである。令が、さては死んだのかと中へ入って見ると、彼は横になって寝ていた。わけを尋ねると「大雪でこの家も食べ物も不足しているから、人のじゃまをしに行くわけにはいらない」と答え泰然としていた。

美人來

隋の趙師雄ちやうしゆうの故事。彼が広東の羅浮山らふさんに行った時、酒場で休んでいると白い服を着た薄化粧の娘がやってきて二人で月あかりのもと酒を飲んだ。娘は芳香をはなっていた。明け方目覚めると、梅の大木の下で寝ていたという。娘は梅の精だった。

何郎

南朝梁の詩人何遜かそん。梅の詩が得意の人。梅を愛して、かつての任地揚州の官舎にみごとな梅の木があったのを追憶し、自ら働きかけて望みどおり梅の季節に再任され、盛りの梅花を眺め暮らした。

【鑑賞】

林逋の七律「山園小梅」に肩を並べようというのが、高啓のこの作である。首聯は梅の超俗性を月の世界（瑤台）にこそあるべきと詠い、頷聯は雪と月とをあしらって気高さと美しさの比喻を用いてあらわし、頸聯は姿と香り、尾聯は梅の真価を知る人がいない。知っているのは私だけという自負心。

首聯は梅の花の世俗離れした美しさ、「瓊姿」は宝石。「玉のように美しい



安田靫彦「羅浮山」
(明治44年ごろ)

この花は、まさに仙人の住む高殿にこそあるべきなのだが、いったい誰がこの江南地方いたところに植えたのだろう」頷聯は梅の花の美しさをいろんな角度から述べ、多少幻想的なイメージ。「咲きはこる梅の花の印象は、たとえば雪が山の中に降り積もる最中、高潔な人格者が眠りについているようなものだ。また月が森におおわれた道を照らし出す中、向うから美しい女性が現れて来るようなものだ」頸聯は「まだ寒くて花が咲かない時、梅の木のままらな影は、風にそよぐ竹に寄りそう。春たけなわになって梅の花も盛りを過ぎたころ、衰えて散った花びらは地面いっぱい広がり苔の上に落ちてている」。素直な自然描写となっている。五句

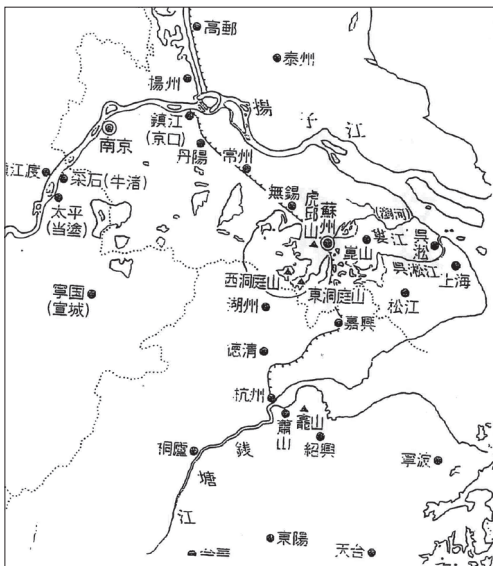
目の「疎影」は、「山園小梅」に出てくる梅を表す言葉である。

尾聯は反語的意味合いがあるようです。「あの南朝の詩人、梅の詩が得意な何遜がいなくなつてから、梅の花の名作は絶えてなく、東風が吹くたびに、悲しみ、寂しがりながらも幾度咲いていったことだろう」林逋がいるではないかと言いたくなりますが、ライバル意識が強いために触れられなかったのか、何遜以降、梅の花を巧みに詠えるのは私だけであるという自負心か。

◆余説 廣瀬淡窓は「古人梅ヲ詠ズル句ヲ品シテ曰ク、高

青邱ガ『雪満山中高士臥。月明林下美人来』ハ林和靖(林逋)ガ『疎影横斜水清浅。暗香浮动月黄昏』(山園小梅)ニ及

バズ、『雪後園林纔半樹。水辺籬落忽横枝』(梅花)ハ其ノ上ナリ、……」(淡窓詩話)といつて高啓の「梅花」をあまり評価せず。



参考資料

- 中国詩人選集「高啓」……………岩波書店
「中国名詩鑑賞辞典」……………角川小事典
「中国詩人伝」……………芸術新聞社
「漢詩を読む」……………平凡社
「漢詩鑑賞辞典」……………講談社学術文庫